

(1) 狩猟採集民「バテンボ」

狩猟採集民のバテンボ族の存在を知ったのは、1982年6月14日～同年9月5日に行った「ザイール河源頭流域踏査隊」の遠征報告によるものであった。これは、関西大学探検部のアフリカ遠征の偵察隊であった。

「未調査、未踏査地域を新しく開拓すべく、我々はそのフィールドをアフリカ中央部を流れる“ザイール河”のもう一つの源流に焦点をあてた(1)」という趣旨で、ピグミーに関する情報収集も目的の一つに加えられていた。

「8/18 7:00起床。チーフの家に荷物を預け、このカサマ村より約5kmほど離れたピグミーの住んでいるキャンプへ見学に行く。カサマ村へ来たヨーロッパ人は我々が初めてだと、部落の人々はものめずらしがっていた。10:20ピグミーキャンプ着。ピグミーと言ってもイトゥリーの森に住んでいるような種族とは違い、少し背が高い。中には背の低い老人や子供もいた。我々がこのキャンプを訪れた時には若い男達は狩りに出かけており、ほとんどの人間はいなかった。住居はわらで作った簡単な小屋で、いつでもすぐに移動できるようなものである。狩猟もネットハンティングによるもので、ムブティピグミーと同じ方法である。彼らの名はバテンボと言ひ、狩猟を主とした狩猟採集民である。現在は近くに塩がとれるので、ここにキャンプをはっているという事である。12:00夜にならないと男達はもどってこないで引き上げることにする。(2)」

「我々が出会った彼らは、カサマ村より30分ばかり森に入った地で狩猟キャンプを開く一家族と呼べそうな小さな集まりだった。彼らは乾期になるとカサマ村近くを流れる川の乾上りより塩を採取するため毎年そこに来るという。(3)」

この報告文と先輩(松原・蓮本)二人の話、その時の写真が、バテンボとの出会いであった。そして、我々は狩猟採集民のバテンボに関する資料を集め始めた。しかし、バテンボに関する資料はキブ州の農耕民のものが僅かにあるだけで、シャバ州のものは遂に見つからなかった。

(2)農耕民バテンボ<キブ州>

ここで、京都大学の米山研究室を中心に調べている、農耕民のバテンボ族について触れておきたいと思う。

「アフリカ研究・第15号」の「ザイール調査報告Ⅰ」で、米山俊直氏が“Kivu湖西Bantu系諸族の集落と生業”という題目で農耕民バテンボ族について報告している。それによると、バテンボの人々は焼畑を中心に耕作をおこない、マニオク、ピーナッツ、トウモロコシ、マメ、バナナ、などを栽培しているようだ。また、陸稲の栽培も認められたと報告している。

「彼等はまた、10人ほどの男性を単位にして共同でネットハンティングをしている。小動物の狩が普通である。(4)」

「アフリカ研究・第17号」で赤阪賢氏が報告している“テンボ学事始ニエスノヒストリニの試み”によると、テンボ族(バテンボ)は海拔2000メートル級のカフジ山系の西斜面、海拔1200から1700メートルにかけての山地林と熱帯雨林への遷移地帯を占めて分布する小部族らしい。推定総人口は5万から6万らしい

「ザイール・ノート」(米山俊直著)から引用させて頂く。

「テンボ族というのは日本語であって、彼ら自身はバテンボという。“バ”は人間集団を総称する接頭辞、単数では“ム”を使う。テンボ族の人が一人ならムテンボである。(5)」

「バテンボ族は、キブ湖の西岸の山脈の西斜面、海拔約3000メートルから800メートルまでの山地に住む焼畑民である。このあたりにもバンブチ族と

呼ばれるピグミー狩猟民が点々といて、彼ら^と共存している。バテンボの名は、ときどき記載されてはいるが、山住みの少数民族ということもあるのか、ほとんど報告がない。(6)』

このように、バテンボ族が焼畑民であると書いている反面、寺島秀明氏がキブ湖の南に点在するバテンボ族を調査し、

「バテンボ族は、バトゥワ族と同じ系統の人々、つまり狩猟採集民ピグミーなのである。(7)」

とも書いてある。ここで初めて、狩猟採集民という言葉が登上したことに注目しておきたい。また、10月以降の雨期には狩猟がさかんになるとも書いており、半農半狩猟といったバテンボ族も存在しているようだ。

これらの調査報告はキブ州の東部地域、キブ湖周辺を対象としたものである。我々が調査した、シャバ州のムエル湖北部山岳地域は、キブ州から約500キロメートルほど南に位置するところである。